

1867年パリ万国博覧会への日本出品—その実相と意味

森 仁史

(金沢美術工芸大学柳宗理記念デザイン研究所シニア・ディレクター)

万博参加とその意図

1867年2月13日(グレゴリオ暦、以下同じ)徳川昭武(1853-1910)は第15代将軍慶喜(1837-1913)の名代として、万国博覧会出席と条約締結国巡歴のため、外国奉行ほかの部下およそ30名とともに横浜港よりフランス郵船アルフェー号でフランスに向けて出港した。幕府の要請に応じて出品物を集めた浅草の商人清水卯三郎(1829-1910)も同じ船に乗っていた。これに先駆けて、1月19日開成所の田中芳男(1838-1916)や清水配下の商人、職人と清水の雇った芸妓ら13名が幕府出品物とともに品川沖からフランスに向けて出港し、3月24日にパリに到着した。徳川昭武一行はスエズ運河を経緯して4月11日パリに到着し、28日にナポレオン三世に謁見し、国書を提出した。7月1日にグランプリ授与式に出席した後、9月1日スイスに向けてパリを出発し、順次オランダ、ベルギー、イタリア、マルタ、イギリスを公式訪問(プロシャは予定されたが、中止)し、各国元首と会見した。

徳川幕府の万博出品は日本公使レオン・ロッシュ(1809-1901)の1865年8月15日付け書簡によって伝えられたフランス政府の要請に応えたものであった。22日には老中、若年寄から出品する意向を返答している。前年1864年7月から12月まで長州征伐が続いた。この年1月にはすでに横須賀製鉄所が着工の運びとなり、幕府開明派による近代化は本格的に緒に就いていた。この事業を全面的に支援したのがロッシュであった。9月にこの準備のため外国奉行柴田剛中^{たけなか}がパリに派遣され、機器の購入と30名を超える技師、職工の採用を進めていた。翌年6月から再び長州征伐が始まり、この最中7月20日に将軍徳川家茂が死去し、12月に慶喜が将軍を継いだ。慶喜はロッシュの建議に基づいて改革を推進し、1866年3月からフランス人軍事顧問による陸軍教練を始めた。幕政運営を陸軍、海軍、会計、国内、外国の5局に専任老中を配置する内閣制度に近い指導体制へと大幅に改編した。これらは薩摩、長州の反幕府派への対抗策であった。このなかで、万博への日本出品の勧誘はフランス政府がイギリスに対抗してアジア地域での影響力拡大を狙った政治的意図が読み取れる。

徳川昭武は慶喜と同じく水戸徳川家斉昭の異母弟であり、16歳年下であった。1867年1月3日にヨーロッパ派遣が水戸家に下命され、昭武は御三家の清水徳川家を継いだ。慶喜はのちに「親藩のなかから器量のある者をえらび、欧州にやって知見を広めさせ、その者をわが嗣にしたい。思うに、民部太輔がそれにふさわしい人である。」¹と語ったと伝えられており、昭武を自らの後継者とするために海外体験を積ませようと考えていた。つまり、将軍はその後の徳川政権が国際環境のなかで欧米諸国と対峙することを予測し、万博参加を海外で帝王学を学ぶ実践の場としようと目論んだ。

万博出品への準備

幕府はロッシュの助言により1865年9月にフランス総領事にFleury Herardを任命した。彼から1866年3月に詳細な出品依頼が江戸に届き、幕府は本格的な出品準備に着手する。これ以前2月に幕府は町奉行が選んだ商人に出品準備をさせようとしたが、選ばれた商人は辞退してしまった。全く未体験の博覧会事業に具体的な指示なしには準備は進められなかったし、このため政府出品の比重は大きくならざるを得なかった。外国奉

行翻訳係であった箕作秋坪を訪ねた浅草の商人清水卯三郎が箕作に勧められ、3月26日に出品を願い出たので、幕府は1万5千両を貸し与え、出品物収集を命じた。清水にとって、箕作はかつてのオランダ語教師であり、清水は1860年に英語会話読本を執筆するほど、海外事情に関心が高かった。清水は武具、衣服、生活用品、画帖、浮世絵、書籍、金属・漆などの細工物からお茶、食料品まで2346点（およそ3万2千両）を集めた。これ以外にも、翌4月幕府は江戸市中の商人7名に骨董品を収めるよう命じ、彼らが集めた陶器、漆器、金工品、医療器具など諸種道具といった古美術品の代金は5月下旬には13,831両に達した。

新規制作による出品準備も進められ、1866年3月から開成所物産学（実際には博物学）出役田中芳男に昆虫、植物標本作成が命じられ、年末には彼の万博派遣が決まった。1863年創設の開成所は洋学の研究教育機関だったので、本草学と呼ばれた博物学（植物、鉱物、動物ほか）の専門家が集められた。そのほか西洋画を研究する画学局が設けられ、これは地理学とともに客観的对象把握の軍事技術としての利用価値が有用視されていたからだった。同局に5月末油絵出品が命ぜられ、11月までに10点の油絵が完成、納入された。（図版1）画題に日本の伝統行事や逸話が多いのはフランスの示唆によるものだろうか。ほかに絵画作品としては、一面が縦48.6cm横60.6cmという日本女性、名所、年中行事を主題として各50枚の浮世絵画帳3帖と縦11.79cm横34.53cmの花画帳2帖の制作が5月15日御細工所に命じられた。前者には市中の浮世絵師芳年、貞秀、国貞ら10名が動員され、10月初旬に始めの2帖だけが納品された。後者は狩野勝川院と文人画家が描いた草花の写生画帖2帖が納入された。

もう一つ開成所が出品準備にかかわったのが騎馬武者人形であった。来日したフランス人商人Chevrillonと7月2日詳細な出品打ち合わせを行ったなかで、彼は張子の馬と武器をもった人形の出品を勧めた。彼はそのほかに、陶磁器はもっと大きなものにすべきであり、紙は製造方法の分かるように、金銀製品が少ないので増やすように、などと事細かに助言した。彼の勧めに従って制作された実物の甲冑をまとった人形は重量が重くなったため、馬は張子から木製に変更され、8月に納入された。（挿図7）

1866年5月19日に幕府は再び町奉行を通じ、博覧会主意と規則書を広く伝え、大名、百姓町人まで資格を問わず出品を募った。この呼びかけに対し、ようやく8月薩摩藩が、12月に佐賀藩が出品を申し入れた。薩摩藩の出品物は砂糖、泡盛、織物、漆器、陶器、籐・竹細工、農具などであり、佐賀藩は有田焼、薬品、徳利のほか海産物、織物などを集めた。

清水は展示物以外に柳橋の芸妓3名（すみ、さと、かね）をパリに連れて行くことを考えついた。清水はこのほか、5名の手代を伴っていた。このうち善八は建築の心得があった。

こうして、次のような日本出品がパリに送られたのであった。²また、出品以外に徳川昭武が各国訪問や儀礼のために持参した品々も海を渡った日本産品として挙げておきたい。なぜなら、これらの一部が各国元首や関係者への贈答品となったからである。箱は船積みされた時の数量であり、大きさは不明である。従って、出品点数を正確に反映するものではない。幕府の荷には前述の騎馬なども含まれていたため、大きな箱もあったであろうが、佐賀、薩摩藩の出品は日用品が多かったのでさほど大きくはなかったことが想像される。

1867年パリ万博日本出品概数

	箱	内訳	出航
政府出品	187 + 釣鐘1、舟2	6681点	1866年12月
商人出品	157	146種	
佐賀藩	516	66243点	1866年9月
薩摩藩	219	122種	

日本の展示

1865年11月16日スエズ運河会社設計技師だった Alfred Chaopn にアジア・アフリカのパヴィリオンと会場中央に新たに建設される Palais de l'Industrie 内のギャラリーの設計が委嘱された。現在フランス国立図書館版画写真室にはその設計図が残されている。シャポンのギャラリー設計(挿図1)は破風や軒飾り、勾欄の形式がすべて中国風であり、当時のフランス建築家のアジア認識が反映されている。日本パヴィリオンも、他の国と同様に事前にフランス側で用意しようとしたと思われる。11月にパリ滞在中の柴田にフランス政府から万博会場図面が手渡されたのはこうした会場準備を経たものだったと思われ、この頃までに日本ほか各国のパヴィリオンの配置(挿図2)も固まっていたと推測できる。

開会後の Le Monde Illustree は評判をよんだ芸妓のパフォーマンス(挿図3)を取り上げた。同紙はこれを最初「薩摩公の家」としたが、のちに清水配下の手になるものだったと訂正した。清水の出品目録には「水茶屋」があるので、現地で組み立てた可能性があり、右に見える農夫は同じく清水の運んだ「人形」のように見える。L'exposition de 1867 Illustree 絵入万博新聞7月22日号に Paul Bellet は日本パヴィリオンについて次のように記している。

...3人の日本の美女、江戸の本物の三人の娘、おさと、おすみ、おかねがいる。...若い女性はお喋りをしたり、羽根つきで遊んだり、阿片の煙草を吸ったりして時を過ごしている。...この近くに二軒目の日本の農家がある。一人の日本人がその地方の習慣であるティー・サロンの準備をしている。日本の茶碗でそれを売るのが、郷土的な色合いと趣味である。

農家のそばの農夫が作業道具を片付けるような小さな小屋に日本の労働階級にありふれた服装をしたいくつもの人形が集められている。それらの人形はとても精巧である。...人々は一見しては人間と陶製人形を完全に見分けることができない

ベレが目撃した人形は幕末日本で流行し、松本喜八郎を始め名人が登場した活人形だと思われ、写真にもぼんやりとそれらしい姿が認められる。これは胡粉で頭部を制作するものなのでベレは見間違えたものと思われる。

実際に建てられた日本のパヴィリオンについては情報が乏しいが、会場を実地に見聞した向山一履が報告(挿図4)で産業宮の外に、中国パヴィリオンを挟んで薩州、商人の2棟の日本パヴィリオンを記した証言は当事者ゆえにもっとも信憑性が高いといえる。これはパヴィリオン竣工後に作成されたと思われる会場図(挿図5)の配置とも符合する。

さらに、この博覧会はナポレオン三世の国内外への政治的デモンストレーションでもあったので、政府は誕生したばかりの新しい映像メディアであった写真によって数多くの記録を残したので、これが有力な手掛かりになる。琉球パヴィリオンと記入された1枚の写真(図版2)が伝わっているが、シャポンの設計した中国風な様式とは明らかに異なり、材料は異なるものの日本建築らしい建物である。屋根の妻と庇とのプロポーション、濡れ縁とそれを支える礎石、沓脱石、障子の棧の間隔と腰板の比率などどこをとっても違和感のないデザインであり、日本人が設計施工したと考えたい。

一体、徳川昭武一行は派遣決定から一行人選までにほぼ1月程度しか準備期間がなかったため、また幕府として具体的な外交的使命を帯びていたわけではないので、その人員構成があいまいであった。主体は駐仏公使を命ぜられた向山一履以下の外国奉行系統9名、昭武傳役を命ぜられた山高信離以下身辺警護役の9名であっ

た。展示の実務を担当できるのは一行のなかでは海外体験のある田辺や本草学の展示体験のある田中くらいであり、それ以外は清水卯三郎と他的手代たちであったから、グランプリを授与された茶屋の制作者として名が挙げられている「大工藤五四郎」は清水の配下なのであると推察しておきたい。この建物の所在位置を隣接する中国パヴィリオンとの位置関係の分かる写真(挿図6)に見えるのは商人パヴィリオンで、会場配置図(挿図2)にある日本パヴィリオンにあたる。この写真に木材による小屋組みが見えるのは、他のパヴィリオンより遅れて建設されたことを示し、このことも清水一行到着後の着工と考えれば納得できる。もう1棟は配置図の動物公園の場所に建てられたことになる。これらを総合すると次ようになる。

準備図面(挿図3)	向山報告(挿図5)	写真	会場図(カルナヴァレ博所蔵) (挿図5)
動物公園	薩州	図版2	琉球
日本	商人	挿図4	日本

琉球パヴィリオンの写真に島津家家紋の入った円形の紋章が見えるのは倒幕に傾いていた島津藩が万博という国際舞台で日本の政治権力が徳川幕府だけではないことを示そうと意図したからだと思われる。たまたま、柴田剛中のパリ滞在中に日本に興味を抱いていたシャルル・ド・モンブラン Charles de Montblanc があまりに頻繁に柴田を訪ねたために、柴田が立腹して追い払ったことを遺恨に思い、モンブランは幕府に復讐の機会を狙っていたところに薩摩藩留学生と知り合い、その代理人として働くことになったとされる。幕府の準備の遅れのためか、博覧会出品目録には出品国として Japon のほか Principaute de Satsouma も掲載されていた。しかし、この看板は JAPON の下に Government du taichiou de Satsouma と記され、明らかに公国から一步踏み出して薩摩藩の政権としての立場を示そうとしたものであった。この主張は4月21日にモンブランも出席した万博事務局と日本出品者との会議の席上でモンブランが「太守政府」と表記したいという主張を見逃し、田辺ら幕府外国奉行が容認してしまったためだと考えられる。同一の紋章が前期の騎馬武者人形に置かれた写真(挿図7)も残されており、耳目を引く出品物を薩摩藩出品であるかの如く装おうとするこの政治的マヌーヴァはヨーロッパ人の発想になるものではないか。また、清水は薩摩藩一行の五代友厚や松木弘安と親交があったし、薩摩藩はベルギーへ商社設立準備のため5月頃にはパリを出発してしまうので、清水が琉球パヴィリオンをも自分の展示販売のために利用したのかもしれない。

日本出品への反響

Ernest Cheneau は万博に展示された日本人の油絵を目にして、「この最初の試みはあわれむべき凡庸さをもって、画学生の作品に似ている事実を偽り隠すことはできない。」と評価し、だから「まだその固有の価値が完全に消失しない間に、この(=日本の:引用者)美術のさまざまな実例を集積することができる」と述べているが、これはやがて来日するフェノロサと同様に西洋美術に冒されない以前の日本美術にこそ日本の個性を発見すべきだという優越感から未発達な美術を救済しようとする発想に重なっている。

この時期には日本の出品物には、芸妓のようなエクゾチズムからの興味を引くことはあったとしても、シェノーのようにあるいはジャポニザンのように日本の造型が持っている特質から新しい創造のヒントをつかもうとする者はこの時点ではごくわずかであった。例えば、日本への興味から1868年3月8日から徳川昭武の絵画教師となり、別離に際して昭武の肖像画を描いた James Tissot や万博の日本出品に注目した Claude Manet などは全くの少数派であった。

11月3日の万博閉幕後、幕府は Chevrillons との間に売れ残った1014件の日本出品物の販売契約を結んだ。

油絵は売れ残ったが、『北斎漫画』や『北斎画譜』は売れてしまったのか見いだせない。佐賀藩もようやく花瓶など 100 箱は売れたが、皿、茶わんなど 400 箱余りは売れる見込みが立たなかった。日欧の生活習慣の違いからすればやむを得ない結果であり、ジャポニスムの隆盛にはまだ早かったのである。これが完売するのは 1874 年ウィーン万博開催の時点のことになる。

むすび

徳川幕府にとって万博出品は自らの意思ではなく外から与えられた機会ではあったが、すでに自ら近代化の路に踏み出していた日本はこの時点でもてる力量と質を提示しようとし、それを実現した。博物標本、建物、紙、漆器、織物などに与えられたグランプリはその証左である。この体験こそが次代の近代を拓く原動力となった。また、ヨーロッパから見れば、単にのちのジャポニスムの源泉になっただけでなく、シェノー以外にもサウスケンジントン博物館は日本出品を大量に購入し、新たな造形のヒントを得ようとする端緒も開こうとしていた。1867 年の日本出品はこうした自他の分岐に位置するものなのである。

図版 1 「イタリア」と記入された美術展示室

図版 2 琉球パヴィリオン

挿図

- 1 *Chapon* 日本ギャラリー (BN 蔵)
- 2 チュニスパヴィリオン (AN 蔵)
- 3 中国、日本パヴィリオン周辺配置図 (BN 蔵)
- 4 *Montani* 薩摩公の家の内部 *Le Monde Illustree* 1867 年 8 月 31 日
- 5 向山作成万博会場配置図
- 6 騎馬武者人形 (AN 蔵)

本論文では特に断らないが、下記の文献を参照した。

拙稿「1867 年パリ万国博覧会における「日本」—日本出品をめぐる—」『戸定論叢』第 3 号、1993 年

「徳川昭武滞欧記録」『日本史籍協会叢書』同会、昭和 7 年

『徳川昭武幕末滞欧日記』松戸市戸定歴史館、1997 年

長井五郎『焰のしみづうさぶらうの生涯』埼玉出版会、昭和 59 年

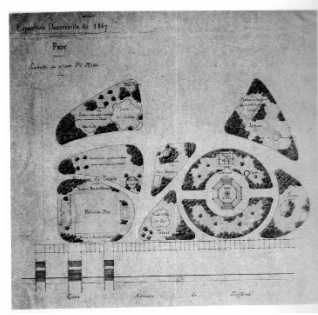
野中萬太郎『仏国航公路記』野中烏犀園本店、昭和 41 年

坂本藤良『小栗上野介の生涯』講談社、昭和 62 年

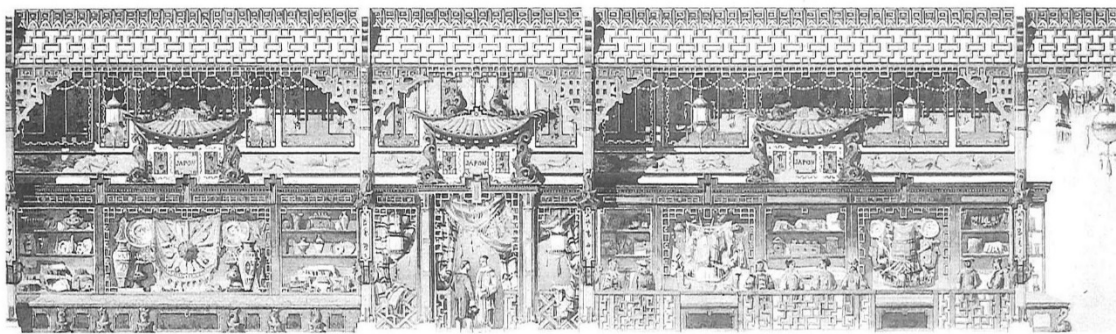
图版 1



图版 2



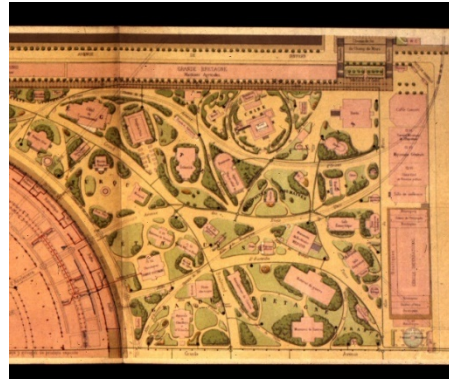
1



2



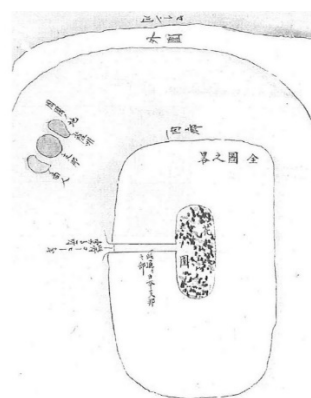
3



4



5



6



¹ 山川浩『京都守護職始末』二 平凡社、1966年

² 幕府作成の全出品目録は次に収録されている。東京国立文化財研究所美術部編『明治期万国博覧会美術品目録』同所、平成9年

* 本論文は下記の展覧会図録に寄稿したものである。原文は日本語だが、発表はフランス語で印刷された。

展覧会は2017年11月22日～18年1月20日にパリ日本文化会館で開かれた。

Hitoshi MORI “La participation du Japon a L’Exposition Universelle de Paris en 1867 : Les œuvres presentees et leur signification, *A l’aube du Japonisme. Premiers contacts entre la France et le Japon au XIXe siecle*, Maison de la culture du Japon a Paris, 2017.